

年に1度のディオス大祭の日、人々が社に向かって歩いていると、テオクリトスはいつも、社の方から下ってくるようにした。

何をしているのかと言われて、彼は、次のように答えた。「私が、この命尽きるまで、やろうとしていることを」

テオクリトスは、東の国ポシリュポンと西の国テンツニーが接する国境の町アリストで、名家の長男として生まれた。

成人して、町の役人として働いているとき、当時の町の指導者たちを批判する言動により、町から追放されたという。

また、クリストブロスが報告する言い伝えでは、次のように言ったという。

「お前たちに追われるのではない。私がお前たちを見捨てるのだ」

この言葉を残し、笑いながら、みずから町を去っていった。

しかし、アイアントドロスの本によると、家が貧しく、それが嫌になったことが理由だという。

シルバテスの町で、「他人との結びつきを大切にしてい、自分を育てよう」というスローガンを掲げた集団が現れた。

この集団への支持が集まって、若者たちの中に、「今こそ絆による革命を！」と叫ぶ者たちが増え始めたころ、その町のそばをテオクリトスが通りかかった。

彼は、町の門の下で、町の方を向いて、立ち続けた。

何をしているのかと通行人に聞かれて、彼は答えた、「病気ににかかった豚どもが外に出ていかないように、わしが見張っている」、と。

ある家の主が死んで、盛大な葬式が行われることになった。

たくさんの人が、涙を流し、故人を偲んでいるところへ、テオクリトスがやってきた。

年に1度の祭のときに着る、派手な衣装を身にまとっていた。

そして、周りのひんしゆくをかうのも構わず、陽気な歌を歌い続けたという。

北東の国アルバスの王が、テオクリトスに興味を示し、彼を召喚した。

自分のところへやって来た、王の使いに、彼は次のような伝言を頼んだ。

「私は、この私自身に仕えるという高貴なる政治に励んでいる。よって、あなたに助言できることは、ただひとつ。

今すぐに退位せよ、そして、自分自身に専念されたし」

さて、アポロドロスの言い伝えによると、この話には続きがある。

テオクリトスの伝言を聞いた王は激怒し、彼を捕まえて、幽閉してしまった。

その話を聞きつけたデメトリオスが、アルバスへ赴き、王を説得して、テオクリトスを釈放させた。

数か月ぶりに姿を見せたテオクリトスは、デメトリオスにこう言った。

「デメトリオスよ、君はそれほど慌てることもなかった。私は、大いなる徳を身につける修行をしていたのだからね」

しかし、イリストンの町の古文書によれば、テオクリトスはアルバスへは行ったことがないという。

ニコストラトスの町で、テオクリトスは、何もせずに、何時間も座っていた。

「この怠け者め」とからかわれて、彼は、次のように応じた。

「いま、この世でもっとも価値のあることをしている。このわしほど、勤勉なものもおるまい」

アンテフォンが、次の話を伝えている。

アダマントスの組とリュサニアスの組に分かれて、競技

大会が行われていた。

どちらの組を応援するかという質問に対して、その場に居合わせたテオクリトスは、次のように答えた。

「そこの運動場は、土が悪い」

そう言って、観戦することもなく、その場を立ち去ったということだ。

デメトリオスが、ある国から助言を頼まれて、南へ行くことになった。

それを聞きつけたテオクリトスは、デメトリオスと対面すると、次のように言った。

「友よ、君が南へ向かうならば、ぼくは北へ赴こう」

そして、デメトリオスが出立するよりも早く、北門から出ていった。

なお、テオドロスが言うには、これ以後、彼らは二度と出会うことはなかったという。

しかし、デモドコスの本によると、この後、テオクリトスも同じ国に呼ばれたため、彼らはすぐに再会したという。

お前はいま何歳なのかと聞かれて、テオクリトスは、次のように言った。

「わしは、1日の終わりに死んで、始まりに生まれている。だから、毎日が誕生日の赤子なのだ」

あなたは何の知識も授けてくれないと批判されたテオクリトスは、微笑んで、次のように言い返した。

「偉大な人間であるならば、本来、何も生み出す必要はないはずだ」

君の友人、デメトリオスはどんな人物かと尋ねられて、テオクリトスは、よどみなく答えた。

「その言葉と行動が一致している。彼ほど、自分と調和している人間はいない」

ある宴に呼ばれて、テオクリトスは出向いた。

しかし、席に座ったものの、料理をひとつも口にしなかった。

なぜ手を出さないのかと質問されると、テオクリトスは深々と一礼して、何も言わずに帰っていった。

あるとき、テオクリトスに憧れ、彼の後をついてまわる者たちが現れた。彼らから、「テオクリトス、テオクリトスよ」と呼びかけられても、テオクリトスは振り向きもしなくなった。

そこで、その中の1人が言った。

「彼は、自分の名前という、もっとも重い荷物を捨てることができたわけだ」

この話を耳にしたデメトリオスは、同意を求められても、

口を閉ざして、何も言わなかった。

テオクリトスとデメトリオスがはじめて顔を合わせたとき、次のような対話をしたという。

「テオクリトスよ、あなたの噂は聞いています」

「噂という名の罵詈雑言のことなら、ぼくも耳にしている。本人に聞こえないところで叩くのが、陰口だと思っていたがね」

「たしかに、あなたを悪く言うものも、中にはあります。しかし、そうではないものも、たくさん」

「世辞はよしてくれ、デメトリオス。世辞ほど虫唾の走るものはない」

しかし、テオブティテスの報告する言い伝えでは、対話の内容は、次の通りだったという。

「テオクリトスよ、一度お会いして、直接お聞きしたいことがあります」

「言ってくれ。尋ねてくれ。私は率直に答えることを誓おう」

「あなたについて様々なことが言われています。自分の発言を打ち消すようなふるまいをしている、テオクリトスは矛盾している、と」

「デメトリオス、友よ、そのためにこそ、昨日と違う今日があるのだ」

自分の人生、はたして生きる意味があるのかと若者から

相談されて、テオクリトスは、相手の肩をたたいて言った。
「どうぞ、ごゆっくり」

セレナスの町には、デメトリオスが死んだときに、テオクリトスが詠んだとされる、次のような詩が残されている。
「君は今、静かに大地に横たわっている
陽の光に包まれて、君は何を考えているのだろうか？
穏やかな風に吹かれて、自分と対話しているのかい？
君は死んだ、ぼくは生きている
だが、それがどうしたというのだろうか！
ぼくたちを飛び越えて、ぼくたちの後からゆっくりと
また別の人たちが、歩いてくるのだろうか
そうだ！ぼくたちは道なんだ！
その途中にある宿なんだ！
だから、ともに見送ろう
ぼくたちの信念が互いに競い合って、遠く旅立つ、その
さまを」

一方で、アイスキネスは、これは、テオクリトスの死に際して、デメトリオスが詠んだ歌だとしている。

しかし、エピゲネスの伝えるところによれば、テオクリトスとデメトリオスは同じ年に死んだが、遠方の国にいたため、お互いの死を知らなかったという。

パラロスの本によると、後年、「なぜ故郷を飛び出したのか」と尋ねられて、テオクリトスは、次のように答えた
と伝えられている。

「いつの頃からか、声が聞こえた。そして、その声が言うのだ。おかしい、流されるな、と。わしはただ、その声に従っただけだ」